

朝、目が覚めて突然物音がした。何だろうと気になつてはみたが何もせずには私ひとりあえず食事をすることにした。

よく最近、綺麗なものをみたくて様々なことをしているのかを教えてくれる人がいてほしいと思う。なぜそのようなことを思うのかも自分ではわからないが、それでも綺麗なことに関心を抱くのは悪くないのではないのだろうかと思つても無理はないのかもしれない。楽しいことばかり考へていたから、いつも笑顔でいられる妖しい人物と評されても仕方のないことなのかもしれない。

食事の良い匂いがして思わず部屋中に光を見せる。電気を点けたと思えばいいのだろうか。綺麗なことには私は嫌いではないからだ。電燈の明滅する音が私の鼓膜を刺激して震えているのは両手。耳と手が反応するなんてとても面白かった。

やがて、フライパンから綺麗なハンバーグができた。美味しそうな見た目のハンバーグは光に照らされて、何度も輝いていた。

そんな朝が始まりの私の日常はこうして始まる。

もしや産み出されてしまったのがこんな日々を失つてしまったのかもと思うほど、私は信じられなかった。あのときそれを信じていればよかったのに。そうして日常は歪み始めたのはいつの日か思い出したい過去だったのだから。

私は記録帳に刻まれている過去の世界を見つめているのはいつでもそうだったから、と同じ

ような過去を繰り返しているメビウスの輪。その中から脱出したくて今日も違う料理を作ろうと意識した。

「涙を拭いたその跡に」

学校に向かってしていると綺麗な花畑が路上に広がっていた。私は何のことかはわからないけど、自分だけの世界の人間がここにある花畑を潰していると感じてしまってしまった。私の心はどこか遠い昔のことを思い出させてくれる。何もできない自分が不憫で仕方なかった。私の言葉はどこにでも広がる。突然のように住宅街の傍から一人の青年が飛び出し、私の瞳を覗き込めるぐらいの近さまで来た。

「やあ、お嬢さん。僕と一緒に学校に向かうよ！」

いきなりな発言にいきなりなことを言う青年を私は記憶の中から探し出す。だけど適当な名前が見つからなかったため青年と呼ぶことにする。

「あんた、誰？」

「酷いなあ。いつもいたじゃないか。傍にいてくださいって昔言っていたじゃん。その頃を思い出してみて」

「知らないよ。名前すら必死に思い出すがぐらいの努力はしたからどうか行って」

「酷いね、ホント。まあいいや。勝手についていかせてしまうよ」

「勝手にすれば」

私の本音は嬉しかったのだが、昔のツンデレがまだここにも残っていたのかを私は感じてしまう。きつと心にも残っている大事な人なんだろうと本心は言っているような気がする。ただ、何もすることがないので、綺麗な瞳の中にゆつくりと花畑を流してみる。

その間に青年は後ろから、綺麗な瞳だねえ、どうしてこんなところにあるのだろう、僕も作って君にプレゼントだ、だなんてことを言っているから、振り向く。

ただどその笑顔で思わず私は表情を緩ませてしまった。

「どうしたの？　もしかして僕に笑顔を咲かせたってことは！」

「知らない！」

私は恥ずかしさと共に脱兎の如く、そのまま一人で走って学校に向かった。その後ろから歓喜の声が聞こえたのは気のせいだろうか。

理こそすべてだとは言わぬが

人の心情にも

ほだされるべきことは

必ずしもあるのかと

思われてしまった

どこにでも行つていい。私はどこでもやり直せる。自分のことをやり直したいのはいつだって自分で勝手に決めつけているだけの人だつていうこと。たとえば、同じやり方でも、それだけ可能性はあるのだから、気のせいと考へているのが正しいと思つても過言ではなく、それだけ人には可能性が残されていると言つたら嘘になるのだろうか。私はいつしかやつてしまいたいことがある。

どこにでも転がつている。そしてどこにでも笑つている人のことを考へることが大切なのだと、知つている。私はどこにでもいる人。

だから彼氏ができたとしても何もできずにいるから。私はそんな何もできない星屑人間だとしても、私としても。それがどれだけ大切なかがわからなくて。それでも目の前に広がる光景を自分のものになりたいのだと言つているのなら、それだけ自分は馬鹿なんだと始めて思ひ知つた。

学校の中で一人で暮らしているのは私だけ。何もしないでいる自分が笑えて、それだけ大切なことをしてきたのだと私の中にいる、あの人には誰にも焦がれる想いがあつた。何を言いたいのだろう。私は何をしているのだろうと、考へてしまう。傍で笑っているのは誰でもない私の友達。どこかで見つめていた空を私は何をしているのだろう。きっとそれだけだ。私はそ

う感じる。

一人で暮らす。それがどうしてもできない人間にはなりたくはない。ただ、それでも自分のことを信じたいと思った、その感情だけを忘れないで、いつまでも平和にいたいなんて思わざるを得ない。

たとえ、全てを失っても私はいるから。人の傍で何もできない自分と人のことを考えているのがいつものこと。私としてもどうだつてなるのはいつものことなんだから。

彼氏なんていたって何にもならないのが事実上。私には恋心があつたのか。それとも何もできないでいる自分がそんなにも虚しいのか。何を変えても、何をしても。それは何を答えにしても無理なものは無理。それを言われたような気がして、たつた一つの宝物も、今では屑になつてしまった。

人の気持ちは変わらない。簡単に変わるなら、私は何もしていない。きっとそれだけ授業がつまらないと思つている。

「はい、今日の授業はここまで。それと音読をしてくれたことには感謝だ。ただ、彼氏やらつまらないなどの言葉は無用だと思つたが」

先生の声が聞こえて教室中に爆笑が流れ、私は赤面しつつ教科書を閉じた。そして昼休みに入った。

たまには

とても楽しいことでもしよう

一人が辛くても

一人が嫌でも

それが楽しみの一つになるから

たとえば世界のことを考えても何をしても意味がないのだと思う。いつしか、自分のことだけを考えていた自分が笑えていた。きつと私のことを知らずに教室の中にいる友達に招待状を作っても意味がないと思う。

何かを意地になつて考えているらしく、私のことなんて眼中にないような素振りが嫌だけど、それでも楽しそうにしている。

きつとこれから楽しいことが起きるのだろうといつものように思っている。そんな気がしてならない。私は私のことをやっておけば、たとえば、失礼なきことが起きててもこれからのことを考えたら、少しは楽しみにしてくれるのだろうか。たつた一つのことを最後までやり通す必要性があるのかはわからないが、私にとつてそれはとても楽しみなつてしまうと思うから、きつとこれからもそういう自分が幸せになつてほしいと思つてしまうのだ。学校の中でそんなことを語る人はいないが、それでも友達という存在には感謝しているのだ。私は私で幸せにな

りたくて考え事をしてしまうのだから結局のところ、綺麗事を考えてしまうのはとても大切なことだと改めて大切なのだと何度も思ってしまうのである。

「結局さあ。私、ここんとこの世間の情勢に振り回されているだけなんじやいかなあつて思うんだよね」

「どうしたの突然」

「あんたみたいな官僚コースを簡単に踏んでいけるほどの頭の良さを持つていないってこと。いつものように楽しんでいればいいなんて、ホント、止めればよかった。少しは大切にしないとね。ホント」

人生を棒に振っていたんだね、とは言わなかったが、それでもこの魔法学校にいる時点で何も楽しみなんて存在しないのだから、綺麗事を言わせてもらうなら、世界のことを知っているだけでも楽しくいられるんじゃない？　なんて言ったら怒られそう。

「じゃ、とりあえず、ご飯はもう終わろつかね」

「あ、待って」

私は友達の配膳を持って、そのまま帰っていく友達を追いかけた。

人の望み

其れ曰く

成し得ぬもの

だが 信ずれば

叶うと謂う

朝、目が覚めたとき、何かが嫌になっている自分がいた。家の中で何をしているのかもわからない自分が傍で何をしているのかがわからず、きつと答えている自分が変だと。自分の感情は何も知らずに笑っていた。何もせずに笑っていた。私の内にある馬鹿な考え。それが笑っていた。笑顔なんて作る必要なんて言っているようで、それがとても不快だった。

気分は最低。これからどうすればいいのかを考えてしまうのはどうしてだろう。気分には圧倒的な勢いで何もできない自分を作り出す。綺麗事なんて嫌いだけど、私は私の中で解決をしているのだとそれは何かを呟いた。綺麗事なんてこれからも続くわけがない。そんなことをじつと言っているようだった。綺麗事なんて嫌いだ。

そう、思っていた。

ただ、私は自分の中に悪球を放り投げられたときの悪役感を感じてしまうことを知っていた。だから私は空を見上げている自分が酷く嫌になっている。それほど、嫌な自分がどこにいてもいそうで、友達のことなんて忘れているんだと、それだけを知っているつもりだった。

——笑ってよ。



——どうしてそんな暗い顔をしているの？

——そんな笑顔じゃ嫌われるよ？

笑ってくれている笑顔が目の前にあつて、常識を知っているのだろうその人に感謝しなければならぬといったの間にか感情的になつてゐる自分がいた。そしてその笑顔を確かめるかのようには手を目の前で合わせる。

——いつの間にか居たつて顔しているね。

私は何もできないんだと、自分のことを忘れていた。そして忘れてゐるから何もできないんだと。

私の手が何かに包み込まれる。きつとこんなことを考えてゐるのは嫌なことがあつたからだろう。それだけ自分の中で嫌なことがあつたのだ。そういう風に理解しなければならない。

「目の前にいるのはただの風だよ」

それが見えているのはどうしてだろう。

笑顔の奥底に眠つてゐる邪悪な感情は。

何も知らないから

人の望みを

知らないから

欠片もないから

それが望み

月の中にある星屑たちの欠片は何かを手に行っているのがわかってしまい、これからの答えを考えていた自分が恥ずかしかった。心に残っている屑は私の何を示しているのかすらわからず、虚空に手を何度も翳す。私は何をしているのかもわからず、私が私でいられるうちに全てに対して答えを出しておきたいと、何を思つて、この世界に身を任せているのだろう。きっと世界は私なんて欠片にもならないのだと思われているのだろう。神に祈りを。どうしてかそんなことを思い出す。

私の悪い癖で何もできないでいられるうちに何もできなかった私の行為をしているのが彼の名前となぜ混ざってしまったのだろうか。どこにでもいる人の気持ちを前向きに捉えて何を手にしているのか、まるでわからなくて。名前すらどこに置いてきたのかを忘れて、何もせずに公園で待っている人を追いかけているかのように、私は何をしているのかを思い出そうとしてどうしてもそんなことをおもってしまうのは悪い癖なんだと自覚しているのにまだ、何もできないでいるんだと、それが正解なんだと、自分に何度も言い聞かせる。

何をすればいいのかを教えてほしいと知っているのは誰もいない。何をしても意味がないのだと知ったとして、その時、私は虚空に手を翳したそれをつかみ取った。ああ、私が知ってい

たもののはこんなにも脆いのだと。ああ、こんなにも虚しかったんだと。

それを知った。それを知ってしまった。私が知ってしまった……。

私には何も無い。私に何が残されているのか。私が何を取り残してしまったのか。私を追いかけていたものはなんだったのか。

「わからない……。だけど、取り残されていた、青い鳥を見つめている自分の視線に」

何かがあった。窓ガラスに残されている自分の鳥を見ていた。小さな幸せを思い出すなんて私が笑える。この頃転がっているであろう、それは私の何かを教えてくれた。

私を知っているのかな？ 私に教えてくれるのかな？ どうしても鏡視したいことを思い出させてくれるのかな？

私は笑った。家の中で誰にもいないからといって、笑ってしまった。もう取り戻せない。もう哀しみしかない。そんな事実につかつたのに、私は笑っていた。私はどうして、そんなことを知ってしまったのだろう。

人の形を為した者が異形の者に変わっている。そしてその変異が私を怪異に身を寄せさせた。だから泣いた。哀しみ。

私の悪い癖はいつだって自分の荷物に変えられてしまうのだから、それだけ自分の幸せを感じ取っているのだから。私のことを思い出してこの人？ は私のことを待っていた。鳥が話した。私は笑った。だから。

今日はこの者の傍で料理を作つてあげよう。そう思った。それがこの者に対する幸せの形なんだろうから。

そして今日からまた新しい日々が待っていると私の中で心に灯が焚かれたのは久しぶりだから。

「さて、頑張ろうか」

人の望みは

何を以てしても

わからず

彼を以てして

わかられるとのことだと

学校に向かう私は何をするでもなく、綺麗なことを考えている、学校の人々が嫌になる時々そんな感情に襲われる。私は何もしていないのに、そうやって心を責め立てているんだってことぐらいを私に何をしているのかを教えてほしかった。楽しくない人生に飽きてしまったのだろうか。そんなことを考えているのは何をしている者でもなく。

海が見たい。ふとそう思った。綺麗な水平線に憧れて漁師を目指した少年を思い出したのだ。

綺麗な瞳れ。それが私の誉れ。

綺麗なことを大切にしているのだと、自分に言い聞かせる。綺麗な瞳を見つめているのは誰だった、同じ。変わらない毎日を変わずに送ることがこんなにも楽しいのだと、どうして。

私は涙を流すしかできないのだろうか。綺麗な空を見つめて飛行機になりたいと思っても空想のことは何も知らない。きつとこれからも変わることのない淡い夢の欠片なのだろうか。私はとても飽いている。飽く。飽きたい。その思いは変わらず。

私のことを知っている人はどこにいたのだろうか。私を教えてくれた人はどこにいたのだろうか。きつとわかる日が来る。この世界に何を残しているのかもわからないのだから、きつと世界のことを教えてくれたのは。

私は学校を見上げる。気づけばチャイムが鳴っていた。楽しい時間の始まりだ。

「さて、いつものように授業を受けますか」

一人で笑っている姿を誰にも見られないように泣いてしまっていた。どうして？ どうして？ 笑ってよ。

心は叫んでいる。何をしても誰にも出来ることのないものを作ってよって。楽しみを知っているのは誰なのだろう、と。

わからない。わからない。ただ一つ言えることは。

私を創ってくれた人を憎むだけ。

その心を全て一つのカタチを壊すだけ。ただただそれだけ。  
学校内に入ると、突然雷雨が鳴り響いた。

綺麗なんて

知っている

楽しいなんて

知ってるから

とても輝く

廊下で立ち竦んで先生は何も言わずに私を見ている。いや、睥睨といったほうが良いのかも  
しれない。私を見ている視線があまりにも妖しかった。その憑依されたような顔つきはなに  
も言わずに教えてくれた気がする。

——何もせずともこのまま先生は還つていく。

人は土に還るといふ。人の理を知っているのは誰だつて幸せだつて思っている。

だけど、大人になると忘れるといふ。世界の暗転後、そのまま、先生は固まっている、いや、  
憑依されて動くことのできない人形と化してしまった。私は笑うとこだったが何も知らずに生  
徒に教えることを選ばなかったのは私だけだったのかもしれない。

きつとそれだけ世界の真ん中で自分自身を叫んでいるのは一人ずつ、知っている人を壊しているのだろう。世界は廊下だけを変えていた。

化け物だらけ。そこには容易な考えでいる生徒なぞ存在しない。私もその一人。だが、私を知っている人はどうして世界の中でこんなにも壊れているのだろう。こんなにもたくさんな世界を教えてほしいと誰が言ったのだろう。

人を壊すのは理性を壊せばいいと思えばいい。ただ単にそれだけ。人は簡単に壊れる。大切なものを失った。

異性との関係をなくした。

時間を無駄に使う。

この三つが恐らくほとんどと呼ばれるのだろうか。だがそれでいいと自分に言い聞かせる。それ以外の答えを求めているのはどうしているのかもわからないから、世界はきつと増え続ける。世界について語りたいがそうやって動ける人はまだいない。

きつとこれからもこの三つの地獄が増え続ける。一步一步、歩んで、止まっている人たちの視線を追う。

全ては空に向かっていた。

そしてそこには、一人だけ浮かんでいる何かがあつた。

私の手はちよつとずつその影に触れていこうとしていた。

人の望みを

手にしたのならば

世界の中心を

望み　そして答えるは

闇の中

くうに立っている青年は私を睨んでいる。何もすることなく、私はつこりと応対する。結局私は何もすることができなかったと、それが非常に悔しくて笑うことすらできなかった。あのときはあのとき。今は未だ。私の感情は揺れてしまうのはどうしてだろうと知っているのかを何ができるのかを知ってしまったから。だから世界の途上に人の望みを叶えていることが私の気持ちなんだろうか。

ときに人は何を知るのだろうか。私は何もすることができなかったから。私はこうして手を伸ばすことぐらいしかできない。きつと一人の生活をもう飽いたから私のことを待ちわびて現れて、そして答えを知りたかったのは、あの人と同じなのは仕方ないのかもしれない。私はずっと悔しい思い出しかないのはどうしてだろうと、世界に教えてもらいたかった。だって、だって。



「どうした、そこのお嬢さん。この僕の手を握ればこれから楽しい旅の始まりだよ。さあ、来るがいい」

もうそれだけで何かが私の中で変わってしまった。答えなんてどこにもない。答えなんて知らない。知ったとしても何もできずに混乱するだけ。一人は嫌だと、一人が嫌いだと。二人なんていらぬ。たった一人。私が求めているのはたった一人の絆。一人、人こそ恋の堕ちる先。心はもうどこにも行けない。

「ええ、貴方の下へと行きたい記憶を封印しましょうか。私に何ができるのかはわからないけれど」

あれ？ 私の心は？ 一人の記憶をなくしていいの？ どうして私を無視するの？ 人の望みは欠片もないのに。どうして、どうして？

「きつとあなたは私を不幸にしている。だから行くのは嫌かな」

だろうな。そしてその青年が手を虚空にかざし、何もしなくてもいいと言っているような仕事でそのまま轟音に巻き込まれる。そして。私が見たものは。

そこにはたった一人の少年が一生懸命に踊りを覚えている最中の一つの思い出を具現化した世界だった。

可能性なのなら

私だけでもと

応えられるのなら

私だけでもと

思い出す

紺色に染まる辺りを静かに見つめている。誰しもが恐れていた校庭に現れた大きな化け物。人、一人で何もできないのは当たり前なような気もする、それほど恐ろしい生き物が青年の手から現れた。ここは伝奇の世界なのだろうか。魑魅魍魎を操るのは誰しもができることではない。魔境、オスペリア——私がもとといった世界の名前、そして滑空の空。人は恐れるのだから、私は何もできない。

「あなたは馬鹿ですね。オスペリアにやって来たときから世界は何も変わらずに思っているのに」

「それを言っちゃあね。でも私を見ているのならそのときに声をかければよかったのに」

「そのときはあなたがわからなかった。世界のことと理解するために犠牲が必要だったんだよ」  
それでも。私は青年のことをはつきりと思い出すことはできなかった。私の心に巣くっているのは、自分と戦っていた、彼らの名前。一人一人に名前を告げて、そして失われてしまった。世界に名前を残し、私を匿った。だけど、何もできないのだと。

怖い、と本能は告げる。人の存在意義を失わされたのはあの青年だけではない。きっとそれが復讐の遠因なんだろう。私のことを覚えているあたりまだ、救いようがあるのかもしれない。だけど、何をしても何もできないのは幾らでもある。世界の真ん中で答えを見つけ出すことをどこで見つけたのかを教えてほしかった。綺麗事なんて嫌いだ、と何度も心は叫んでいる。本能はついに泣き出した。

ただ、私の見つめている先は何も残されていないのが今でも悔やまれる。そして答えを教えてくれたのなら、世界は助かるのだから。

「どうした。あなたはこの世界に何の未練もないはずだが」

「ええ。私は関係ないはず。だけど愛着があったのよ。だから今でもここにいます」  
ならば。もう関係ないのなら。

「私はこの世界と共に暮らすわ」

青年の顔が驚愕の顔色に変わった。それが最後のチャンスだった。

世界の安定を望み

世界の破滅を祈り

一人で輝いた証を

世界は求め

人が答えた

学校のみんなと私は仲良く食事を先生が提供してくれたものを食べていた。あつさりとの青年は帰っていったが、私を望んだ理由は何かだっただろうと思ったが、それでもこうしてここでみんなと居られることが今の私の幸せだった。

森の中。一人で寂しがって暮らしていた頃とはもう違うんだ。そう自分に言い聞かせていたときもあった。私は一人じゃない。いつだって友達はいるんだ。私と共に暮らす人がいるんだ。そう思つて、早く、この森の中から出たいと、あの青年に頼んだのが運の尽き。私は不幸になつてしまったのだろうか。それでもよかった、自分が馬鹿らしかった。

暗転の空。滑空に飛ぶ鳥を見つめて、私は笑顔を称える。

寒い神無月の季節。人が知る幸せの形はこんなにも簡単にできるなんて思っていなかった。だけど、一人でいつも苦しんでいた頃と遥か遠くに自分のいられる場所があった。ここは温かい。ぬくもりを感じて、そしてその中にある本当の優しい笑顔を知ったから。きっといつまでもこの幸せが続いていくんだと。そう思っている。

「ほら、そのその薬草とつてよ。綺麗でしょ？」

私のはにかんでみんなに渡しているのはまだ幼かったところにお父さんが教えてくれた薬草だ。私はいつの日か大切な人ができたときにそれをあげようとしていたもの。

みんなが笑っている。いつまでも涙を拭いたその後、その理由を言う。それが今の私にできる贖罪なのだろうか。

そしてその後、また笑えればいい。きっとあの青年と共に暮らした、あの生活を忘れることで今の幸せがよりよく幸せになるのだと信じている。きつときつと。

空を見上げれば鳥たちがいつまでも鳴いている。もうこの世界から別れを告げることはないんだよと。

そんなことを伝えてくれた気がして、また笑った。

望みを知る者が

望みを叶え

希望を持つものが

幸せを持ち

以てして世界を幸せにする